徳島大学　人間科学研究
第23巻（2015）　1－17

保育場面における保育者のオノマトペ使用に関する意識

上原　郁美[1)]　山本真由美[2)]

The awareness of nursery teachers using onomatopoeia in nursery scene

Ikumi UEHARA[1)]　Mayumi YAMAMOTO[2)]

Abstract

The purpose of this study is to investigate to which extent nursery teachers are using onomatopoeia and if there are differences in the use of onomatopoeia according to the age of the infants. The method used was an awareness survey and the collaborators were nursery teachers in the nursery. The result of the survey was as follows: the frequency of use of onomatopoeia was the highest for 0 year old infants and was lowering as the age increases. From this, it can be considered that nursery teachers were changing the object used for onomatopoeia according to the age of the infants. In the case of infants with development problems, the result was an increase of using onomatopoeia for the 0 and 1 year old infants. For the infants with development problems, the use of onomatopoeia was considered to be helpful to individual encouragement. The most frequent place for using onomatopoeia is the guidance place, then comes exercise（play）place. We could see that onomatopoeia is being used as a very important word in the different child care scene.

Key Words: onomatopoeia, nursery teachers, nursery scene

1)　四国銀行
Shikoku Bank
2)　徳島大学大学院ソシオ･アーツ･アンド･サイエンス研究部
Institute of Socio-Arts and Scienses, Tokushima University

はじめに

オノマトペとは，擬音語，擬声語，および擬態語の総称を指す言葉である。英語のonomatopoeia は，「音の模倣によって物事や動作を命令したり，それによって言葉を作ったりすること」，あるいは「このような方法によって作られた言葉」と定義される（田守,2002）。擬音語は，声以外の自然界の物音を真似て作られ,「どんどん（戸を叩く）」「ごろごろ（雷が鳴る）」などがある。擬声語は，動物の鳴き声や人間の声を模写して作られた語で,「わんわん（鳴く）」「げらげら（笑う）」などがある。擬態語は，事物の状態・動作・痛みの感覚・人間の心理状態などを象徴的に表したものである。「にこにこ（笑う）」「ぴかぴか（光る）」などがそれに当たる。さらに田守（2002）が「オノマトペは，基本的にその音の響きから得られる意味を表すので，感覚的な言葉であるが，一般語彙よりも生き生きとした臨場感に溢れ，繊細かつ微妙な描写を可能にすることから，日本語には不可欠な言語要素である」と述べているように，オノマトペは私たちにとって非常に身近な言葉であり，物事を表現する時やコミュニケーション場面など，日常生活の中で重要な役割を果たしている。オノマトペは非常に短い音節で構成され，五感に働きかけ，五感を使って印象を鮮明かつ簡潔に表現することを可能とする言語活動の 1 つである（原子・奥野，2007）。

丹野（2005）は,「子どもと接する時，保護者や保育者，子どもの周囲の人々は，オノマトペを多発する傾向にある」と報告しており，保育場面においても，保育者は言葉の補助として乳幼児に対してオノマトペを用いることが多い。それによって乳幼児は，一般語だけの表現よりも言葉の内容を理解しやすく，イメージを膨らませやすくなる。このようにオノマトペは，日常場面や保育・教育場面において重要な役割を担っているが，これまでオノマトペに関する研究はあまり注目されて来なかった。その理由として田守・スコウラップ（1999）は，感覚的に理解できる論理的な言葉ではないこと，言語研究の規範となる欧米ではオノマトペ自体が少ないこと，漫画や小説などの娯楽作品の中で多く使われ，格式に欠けること，幼児語に類似していることなどが指摘されてきたためと報告している。しかし，オノマトペの重要性が論じられて以来，これまでなされてきたオノマトペへの過小評価が見直され,短歌や文学的表現，スポーツ習得，外国人の日本語習得，学校教育など，さまざまな研究分野でオノマトペの重要性が注目され始めている。早川（1981）や苧阪（1999）は，オノマトペの有用性について「音韻の獲得とその弁別を可能にしていること」,「信号関係から記号関係へと理解を促進させるなどの言語発

達の過程において重要な役割を担っていること」,「認知と行為の諸相を心の内面から描き出すことばとして，どのように外界を認知しているかを検討するための有効な手がかりになり得ること」などを挙げている。近年では，主に日本を中心として，日本語学領域や言語発達領域などで研究がなされつつあるものの，オノマトペに関する知見はいまだ十分なものとはいえない（近藤・渡辺・越中，2008）。

高野・有働（2007）は，知的障害児に対する教育場面において教師が使用したオノマトペとそれに対する児童の反応を観察し，その中でオノマトペは，臨場感，動作を促す効果的な教示，作業の応援，リズムの産出という 4 つの役割を果たしていたこと，オノマトペの持つリズム，音，有縁性，感性に訴える力などの特性によって授業での体験が印象づけられ，児童が自信を持って取り組むことへの手がかりとなったり，コミュニケーションの基盤となったりするなど言葉の発達への効果的な支援ツールとして貢献していることを報告している。発達障害児は健常児より語彙が少なく，形容詞や形容動詞を用いた動作伝達は困難であるとされているが，オノマトペは動作に伴う音や動作から受け取る印象を感覚的に表現しているため，初めて耳にするオノマトペであっても比較的理解しやすい（吉村・関口，2006）。このような理由からオノマトペは障害のある子どもたちが感情や意思を表現する際に用いやすい言葉としても着目されている。

これまで行われてきたオノマトペに関する研究は，子どもが発するオノマトペに焦点を当てたものがほとんどであり，保育場面において保育者が発するオノマトペに焦点を当てた研究は少ない。保育者のオノマトペに注目している数少ない研究として，原子・奥野（2007）や近藤ら（2008）の研究が挙げられる。原子・奥野（2007）は，絵画および制作指導・リズム運動・歌唱場面と保健指導の 4 つの保育指導場面において，保育者が使用したオノマトペとそれに対する幼児の反応を観察した結果，保育者は動作や動きの状態を表現する時にオノマトペを多用しており，それに伴い幼児はスムーズに動くことができていたことから保育者が動作や動きを表す言葉と一緒にオノマトペを使用することによって，より効果的に指導することができたと報告している。近藤ら（2008）は自然体験活動に焦点を当て，保育におけるオノマトペ表現に関する実態調査を行い，保育者が幼児の発するオノマトペを肯定的に受け入れることが幼児の好奇心や自発性の向上をさらに促進し，そのような働きかけは幼児と保育者とを繋ぐ架け橋としての役割を担っていると報告している。保育者が幼児にオノマトペを用いて語りかけることで幼児は外

界の対象を適切に認識しやすくなると考えられる。このように，保育場面でのオノマトペに関する研究はいくつかなされているものの，観察による事例研究がほとんどであり，保育者に意識調査を行った研究はなされていない。

そこで，本研究では，これまであまり焦点が当てられて来なかった保育者を対象に意識調査を実施し，どのような場面で，どの程度オノマトペを使用しているのか，乳幼児の年齢によってオノマトペの使い方に違いがあるのかというオノマトペの使用傾向，保育者自身が乳幼児に対してオノマトペを使用することについてどのような意識を持っているのかを明らかにすることを目的とした。

方法

１．調査協力者

A 県内の 2 ヵ所の保育園に勤める保育者 37 名を対象に，質問紙調査を実施した。

２．調査実施期間

質問紙調査は，2014 年 11 月 12 日（水）から 11 月 28 日（金）に実施した。

３．調査手続き

上記の調査協力者に対し，実施期間中に，調査者が保育園の保育者に質問紙を配布した。提出期限は配布から 2 週間後とし，記入後，保育園内に設置した回収ボックスに投函してもらった。提出期限後，調査者が保育園に回収ボックスを受け取りに行った。

４．質問紙の構成

はじめに，「○歳児（1 ～ 5 歳児）を担当したことがありますか」と尋ね，今までに担当したことがある年齢の質問紙のみに回答するよう教示した。場面ごとのオノマトペの使用頻度については，原子・奥野（2007）を参考に，保育者と相談して修正し，「運動」，「生活指導」，「音楽」，「絵画・制作指導」の 4 つの場面を項目として使用した。なお，乳幼児の年齢を考慮し，0 歳児，1 歳児は「音楽」と「絵画・制作指導」を受ける年齢に達していないと考え，質問項目から除き「運動」と「生活指導」の場面についてのみ尋ねた。2 歳児以降は 4 つの場面すべてについて回答を求めた。質問紙の構成は以下の通りである。

（1）今まで担当したことがある乳幼児の年齢（0 ～ 5 歳児）

今まで担当したことがある乳幼児の年齢（0 ～ 5 歳児）について，「はい」，「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。

（2）オノマトペの使用頻度

オノマトペの使用頻度について，「わからない」，「まったく使わない」，「あまり使わない」，「時々使う」，「よく使う」の 5 件法で回答を求めた。

（3）オノマトペの使用傾向

オノマトペの使用傾向について，「わか

らない」,「まったく使わない」,「あまり使わない」,「時々使う」,「よく使う」の 5 件法で回答を求めた。

(4) オノマトペを使用する対象の乳幼児

オノマトペを使用する対象の乳幼児について,「全体に対して」,「発達が気になる園児」,「その他」の 3 件法で回答を求めた。その他と回答した場合には,自由記述欄への記入を求めた。

(5) 場面ごとのオノマトペの使用頻度

場面ごとのオノマトペの使用頻度について,「わからない」,「まったく使わない」,「あまり使わない」,「時々使う」,「よく使う」の 5 件法で回答を求めた。

(6) オノマトペ使用の有効性

オノマトペ使用の有効性について,「わからない」,「まったく思わない」,「あまり思わない」,「そう思う」,「非常にそう思う」の 5 件法で回答を求めた。

(7) 自由記述欄

自由記述欄には,オノマトペを使用する場面,使用する目的(乳幼児に期待していること),使用したオノマトペ,それに対する乳幼児の反応などについて具体的に記入を求めた。

(8) フェイスシート

フェイスシートでは,保育者の性別,年齢,保育経験年数,現在の担当クラスについて記入を求めた。

5. 分析手法

保育者が用いるオノマトペの使用頻度,オノマトペや一般語の使い方,オノマトペを使用する対象の乳幼児,場面ごとのオノマトペの使用頻度,オノマトペを使用することに対する意識それぞれについて,乳幼児の年齢によって違いがみられるかを検討するため,SPSS(ver.20)を用いて 1 要因分散分析,2 要因分散分析を行った。Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられた場合は,ノンパラメトリック検定の Kruskal-Wallis 検定を行った。

結果

1. 回答率・有効回答率

質問紙の回収率は 59.5 %であり,そのうちの有効回答率は 77.3 %であった。回答に不備があったものを除き,17 名を分析対象とした。

2. オノマトペの使用頻度

乳幼児の年齢によって保育者が用いるオノマトペの使用頻度に違いがあるかを検討するために,1 要因分散分析を行ったところ,有意差がみられた($F(5,57)=13.933$, $p<.001$)。したがって,乳幼児の年齢によって保育者が用いるオノマトペの使用頻度に違いがあるということがわかった。各年齢の乳幼児に対して保育者が用いるオノマトペの使用頻度を図 1 に示した。

次に,どの年齢間で保育者が用いるオノ

マトペの使用頻度に違いがあるかを調べるために，各年齢のペアごとに比較した。それにより得られた有意確率を表 1 にまとめた。有意差がみられた結果は網掛けで示した。図 1，表 1 に示したように，保育者が用いるオノマトペの使用頻度は，0 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて徐々に低くなり，5 歳児で最も低いという結果になった。0 歳児，1 歳児に使用する場合は，3 歳児，4 歳児，5 歳児に使用する場合と比べて高かった。2 歳児に使用する場合は，4 歳児，5 歳児に使用するよりも高かった。3 歳児に使用する場合は, 5 歳児に使用するよりも高かった。

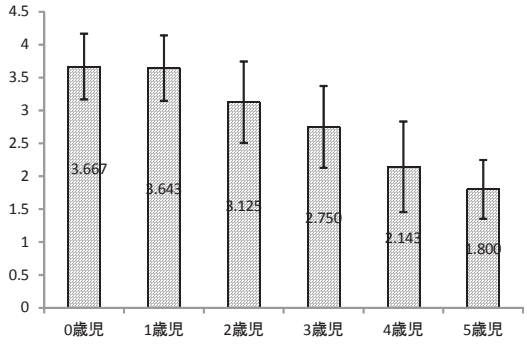

図 1．各年齢を対象に保育者が用いるオノマトペの使用頻度

表1. ペアごとの比較による有意確率
（オノマトペの使用頻度）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		1.000	0.228	0.008	0.000	0.000
1歳			0.154	0.003	0.000	0.000
2歳				0.533	0.005	0.000
3歳					0.245	0.034
4歳						0.910
5歳						

３．オノマトペの使用傾向

乳幼児の年齢によって，保育者が用いるオノマトペや一般語の使い方に違いがあるかを検討するために，オノマトペのみを使用する場合，オノマトペと一般語を使用する場合，一般語のみを使用する場合で，それぞれ 1 要因分散分析を行った。その結果，オノマトペのみを使用する場合と，オノマトペと一般語を使用する場合に有意差がみられた（オノマトペのみ：$F(5,49)=8.094$，$p<.001$，オノマトペと一般語：$F(5,58)=16.976$, $p<.001$）。

一般語のみを使用する場合で 1 要因分散分析を行ったところ，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられた（$F(5,47)=6.187$，$p<.001$）。そのため，等分散でないと仮定し，ノンパラメトリック検定の Kruskal-Wallis 検定を行った。その結果，年齢間で有意差がみられた（$\chi^2=14.569$，$df=5$，$p<.012$）。したがって，乳幼児の年齢によって保育者が用いるオノマトペや一般語の使い方に違いがあるということがわかった。各年齢の乳幼児に対して保育者が用いることば（オノマトペ・一般語）の使用頻度を図 2 に示した。

次に，どの年齢間で保育者が用いるオノマトペや一般語の使用頻度に違いがあるかを調べるために，各年齢のペアごとに比較した。それにより得られた有意確率を表 2 から表 4 にまとめた。有意差がみられた

結果は網掛けで示した。

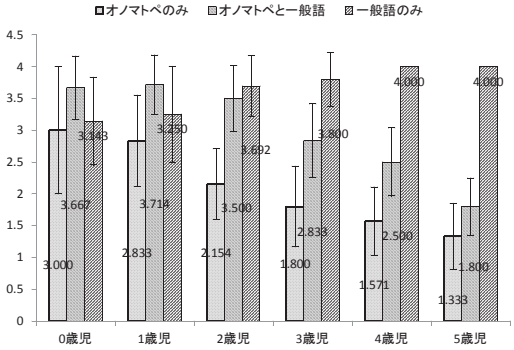

図２．各年齢児を対象に保育者が用いることばの種類別使用頻度

表2. ペアごとの比較による有意確率
（オノマトペのみの使用頻度）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		0.995	0.095	0.008	0.003	0.001
1歳			0.135	0.009	0.003	0.001
2歳				0.807	0.442	0.150
3歳					0.982	0.757
4歳						0.987
5歳						

表3. ペアごとの比較による有意確率
（オノマトペと一般語の使用頻度）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		1.000	0.970	0.007	0.000	0.000
1歳			0.863	0.001	0.000	0.000
2歳				0.015	0.000	0.000
3歳					0.714	0.005
4歳						0.177
5歳						

表4. ペアごとの比較による有意確率
（一般語のみの使用頻度）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		0.616	0.057	0.025	0.007	0.011
1歳			0.102	0.044	0.012	0.018
2歳				0.618	0.224	0.254
3歳					0.450	0.477
4歳						1.000
5歳						

図 2，表 2 から表 4 に示したように，オノマトペのみの使用頻度は，0 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて低くなり，5 歳児で最も低いという結果になった。0 歳児，1 歳児に使用する場合は，3 歳児，4 歳児，5 歳児に使用する場合と比べて高かった。

オノマトペと一般語の使用頻度は，0 歳児から 2 歳児にかけて増加し，それ以降は減少していくという結果になった。0 歳児，1 歳児，2 歳児に使用する場合は，3 歳児，4 歳児，5 歳児に使用する場合と比べて高かった。3 歳児に使用する場合は，5 歳児に使用するよりも高かった。

一般語のみの使用頻度は，年齢が上がるにつれて増加し，4 歳児，5 歳児で最も高いという結果になった。0 歳児，1 歳児に使用する場合は，3 歳児，4 歳児，5 歳児に使用するよりも低かった。

４．オノマトペを使用する対象の乳幼児

乳幼児の年齢によって，オノマトペを使用する対象の乳幼児に違いがあるかを検討するために，全体に対して使用する場合と発達が気になる園児に対して使用する場合を要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられた（全体：$F(5,58)=17.199$, $p<.001$, 発達が気になる園児：$F(5,58)=5.862$, $p<.001$）。そのため，等分散でないと仮定し，ノンパラメトリッ

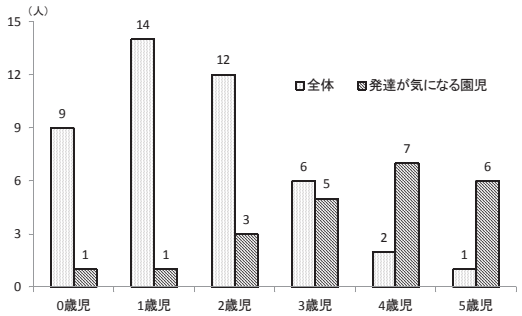

図３．対象別 保育者がオノマトペを使用する人数

表5. ペアごとの比較による有意確率
（全体に対してオノマトペを使用する場合）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		1.000	1.000	0.228	0.014	0.011
1歳			1.000	0.098	0.004	0.004
2歳				1.000	0.107	0.075
3歳					1.000	1.000
4歳						1.000
5歳						

表6. ペアごとの比較による有意確率
（発達が気になる園児に対してオノマトペを使用する場合）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		1.000	1.000	1.000	0.017	0.007
1歳			1.000	1.000	0.003	0.001
2歳				1.000	0.021	0.009
3歳					0.568	0.238
4歳						1.000
5歳						

ク検定の Kruskal-Wallis 検定を行った。

その結果，全体に対して使用する場合と発達が気になる園児に対して使用する場合のそれぞれに，年齢間で有意差がみられた（全体：χ^2=27.567，df=5，p<.001，発達が気になる園児：χ^2=28.755，df=5，p<.001）。したがって，乳幼児の年齢によってオノマトペを使用する対象の乳幼児に違いがあるということがわかった。保育者がオノマトペを使用する対象の乳幼児別人数を図３に示した。

次に，どの年齢間でオノマトペを使用する対象の乳幼児が異なるかを調べるために，各年齢のペアごとに比較した。それにより得られた有意確率を表 5，表 6 にまとめ，有意差がみられた結果は網掛けで示した。

図 3，表 5，表 6 に示したように，全体に対して使用する場合は，0 歳児から 1 歳児にかけて増加し，それ以降は減少していくという結果になった。0 歳児，1 歳児より 4 歳児，5 歳児に使用することが有意に少なかった。発達が気になる園児に対して使用する場合は，0 歳児，1 歳児から年齢が上がるにつれて増加していくという結果になった。

0 歳児，1 歳児，2 歳児より 4 歳児，5 歳児に使用することが有意に多かった。

５．場面ごとのオノマトペの使用頻度

乳幼児の年齢によって，場面ごとで保育者が用いるオノマトペの使用頻度に違いがあるかを検討するために，1 要因分散分析を行った。その結果，運動，生活指導，音楽，絵画・制作指導のすべての場面において有意差がみられた（運動：F(5,59)=10.044，p<.001，生活指導：F(5,59)=14.093, p<.001，音楽：F(3,38)=8.872, p<.001，絵画・制作指導：F(3,38)=12.265, p<.001）。

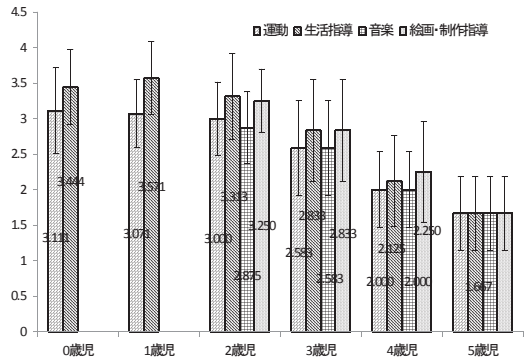

図４．保育者が用いる場面別のオノマトペの使用頻度

表7. ペアごとの比較による有意確率
（運動場面でのオノマトペの使用頻度）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		1.000	0.997	0.271	0.002	0.000
1歳			0.999	0.235	0.001	0.000
2歳				0.371	0.001	0.000
3歳					0.207	0.019
4歳						0.873
5歳						

表8. ペアごとの比較による有意確率
（生活指導場面でのオノマトペの使用頻度）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		0.996	0.995	0.201	0.000	0.000
1歳			0.841	0.030	0.000	0.000
2歳				0.299	0.000	0.000
3歳					0.113	0.003
4歳						0.713
5歳						

表9. ペアごとの比較による有意確率
（音楽場面でのオノマトペの使用頻度）

	2歳	3歳	4歳	5歳
2歳		0.532	0.005	0.000
3歳			0.122	0.012
4歳				0.693
5歳				

したがって，乳幼児の年齢によって場面ごとで保育者が用いるオノマトペの使用頻度に違いがあるということがわかった。各年齢の乳幼児に対して保育者が用いる場面別のオノマトペの使用頻度を図 4 に示した。方法でも述べたように，乳幼児の年齢を考慮し， 0 歳児と 1 歳児は音楽と絵画・制作指導を受ける年齢に達していないと考え，この 2 つの場面に関しては 0 歳児と 1 歳児を除き，2 歳児以降を対象にした。

次に，どの年齢間で保育者が用いるオノマトペの使用頻度に違いがあるかを調べるために，各年齢のペアごとに比較した。それにより得られた有意確率を表 7 から表 10 にまとめた。有意差がみられた結果は網掛けで示した。

図 4，表 7 から表 10 に示したように，運動場面で保育者が用いるオノマトペの使用頻度は，0 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて低くなった。0 歳児，1 歳児，2 歳児に使用する場合は，4 歳児，5 歳児に使用するよりも高く，3 歳児に使用する場合は 5 歳児に使用するよりも高かった。

生活指導場面でのオノマトペの使用頻度は，0 歳児から 1 歳児にかけて増加し，それ以降は減少していくという結果になった。0 歳児，2 歳児に使用する場合は，4 歳児，5 歳児に使用するよりも高かった。1 歳児に使用する場合は，3 歳児，4 歳児，5

表10. ペアごとの比較による有意確率
（絵画・制作指導場面でのオノマトペの使用頻度）

	2歳	3歳	4歳	5歳
2歳		0.275	0.002	0.000
3歳			0.158	0.002
4歳				0.284
5歳				

歳児に使用するよりも高かった。3 歳児に使用する場合は，5 歳児に使用するよりも高かった。

音楽場面でのオノマトペの使用頻度は，0 歳児と 1 歳児に使用する場合を除いているため，その中で最も年齢が低い 2 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて低くなった。2 歳児に使用する場合は，4 歳児，5 歳児に使用するよりも高く，3 歳児に使用する場合は，5 歳児に使用するよりも高かった。

絵画・制作指導場面でのオノマトペの使用頻度も音楽場面と同様に，0 歳児と 1 歳児に使用する場合を除いているため，その中で最も年齢が低い 2 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて低くなった。2 歳児に使用する場合は，4 歳児，5 歳児に使用するよりも高く，3 歳児に使用する場合は，5 歳児に使用するよりも高かった。

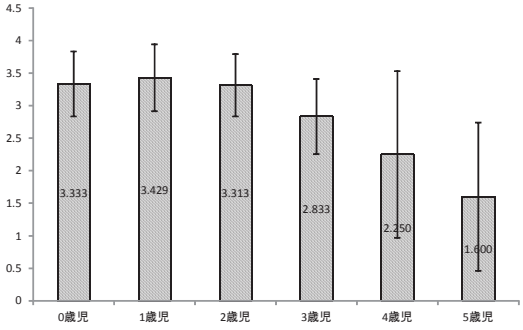

図５．年齢ごとに保育者が感じている
オノマトペ使用の有効性

６．オノマトペ使用の有効性

オノマトペ使用の有効性は乳幼児の年齢によって異なっているかについての保育者の意識を検討するため，1 要因分散分析を行った。その結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられた（$F(5,58)=4.455$, $p<.001$）。そのため，等分散でないと仮定し，ノンパラメトリック検定の Kruskal-Wallis 検定を行った。その結果，年齢間で有意差がみられた（$\chi^2=21.736$, $df=5$, $p<.001$）。したがって，乳幼児の年齢によってオノマトペ使用の有効性に違いがあると保育者が感じているということがわかった。各年齢の乳幼児に対してオノマトペを使用することについて，保育者がどの程度有効であると感じているかを図 5 に示した。

次に，どの年齢間で保育者が感じているオノマトペ使用の有効性に違いがあるかを調べるために，各年齢のペアごとに比較した。それにより得られた有意確率を表 11 にまとめた。有意差がみられた結果は網掛けで示した。図 5，表 11 に示したように，保育者がオノマトペを使用することについて有効であると感じている程度は，0 歳児から 1 歳児にかけて高くなり，それ以降

表11. ペアごとの比較による有意確率
（オノマトペ使用の有効性）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
0歳		1.000	1.000	1.000	0.391	0.029
1歳			1.000	0.367	0.081	0.005
2歳				1.000	0.233	0.014
3歳					1.000	0.914
4歳						1.000
5歳						

は減少していくという結果になった。0 歳児，1 歳児，2 歳児にオノマトペを使用する場合は，5 歳児に使用するよりも有意に高かった。

５．自由記述

具体的にどのような場面で，どのようなオノマトペを使用しているか，オノマトペを使用する目的，オノマトペを使用した際の乳幼児の反応について，自由記述で回答を求めた。それにより得られた回答を表 12 にまとめた。なお，乳幼児の反応について未記入の回答がいくつかみられたため，その部分は空欄にしている。表 12 に示したように，自由記述で得られた回答では，保育者がオノマトペを使用する場面は生活指導場面が最も多く，次いで運動や遊びの場面が多かった。オノマトペを使用する対象は 0 歳児，1 歳児，2 歳児が多く，4 歳児に使用したという回答は 1 つのみで，5 歳児に使用したという回答は得られなかった。オノマトペを使用する目的については，「動作を促すため」という回答が最も多かった。他には，「物の状態を表すため」や「わかりやすく伝えるため」などの回答が得られた。それに対する乳幼児の反応は，「スムーズに動くことができた」，「すぐにその行動に移った」などの回答が得られた。

考察

本研究の目的は，保育者を対象に意識調査を実施することで，保育場面において保育者はどのような場面で，どの程度オノマトペを使用しているのか，乳幼児の年齢によってオノマトペの使い方に違いがあるのか，保育者自身が乳幼児に対してオノマトペを使用することについてどのような意識を持っているのかを明らかにすることであった。得られたデータを分析した結果，保育者が用いるオノマトペの使用頻度，オノマトペの使用傾向，オノマトペを使用する対象の乳幼児，場面ごとのオノマトペの使用頻度，オノマトペを使用することに対する意識それぞれについて，乳幼児の年齢によって違いがあるということが示唆された。それぞれの結果について考察を行い，今後の保育や教育場面におけるオノマトペの利用可能性について言及する。

表12. 自由記述により得られた回答

年齢	場面	オノマトペ	使用する目的	乳幼児の反応
0歳	生活指導	マンマしよう	食事を促す	食べた
	生活指導	モグモグ，カミカミ	咀嚼を促す	
	散歩時	ブーブー来たよ	車の存在を知らせる	
	遊び	ワンワンおるよ	犬の存在を知らせる	
	遊び	おっちんとん（座る）	身体の動きを促す	座る・立つ行動を楽しんでいた
1歳	生活指導	ねんね，ゴロンするよ	昼寝を促す	布団に横になった
	生活指導	ないないして	片付けを促す	片付けをした
	生活指導	ポイしよう	ゴミを捨てさせる	
	生活指導	ゴシゴシしよう	手洗いを促す	手を洗った
	生活指導	ピッピしよう	熱を測る	測ってもらおうとする
2歳	生活指導	おててゴシゴシしよう	わかりやすく伝える	より手をこすって洗っていた
	生活指導	ブクブクうがいしよう	うがいを促す	うがいをした
	遊び	ピョンと飛んでね	ジャンプのイメージをわかりやすく伝える	スムーズに遊べた
	運動	足ドンドンして	身体を動かしやすくする	
	プール	手足ブラブラしよう	準備体操を促す	手足を動かすのを楽しんでいた
	制作指導	グルグル，カキカキ	描くことを促す	
3歳	生活指導	水がジャージャー出しっぱなしよ	水を止めさせる	水に意識が行き水を止めてくれた
	運動	ゴロゴロってするよ	わかりやすく伝える	マットの上を転がった
	制作指導	ペタペタしよう	のり付けを促す	
	トラブル	パッチンしたらだめ	してはいけないことを伝える	謝った
4歳	遊び	ユラユラ，モクモク	物の状態を表す	

（1）オノマトペの使用頻度

保育者が用いるオノマトペの使用頻度を乳幼児の年齢ごとに比較した結果，0 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて低くなることがわかった。このことから，保育者は乳幼児の年齢ごとにオノマトペの使用頻度を変化させていることが考えられる。

原子・奥野（2007）において，「幼児期の思考は行動を通して行われる，具体的思考と言われている。年少児は視覚に入ったそのままを表現することが多く，表現方法の一つとしてオノマトペを使っている。教師は幼児の発した言葉を一度受け止めてから，言い換えたり，新しい言葉を教えたりして応答することが多い。しかし，年長児になるにつれ，語彙数も増えてくるので，言語的思考ができるようになってくる。教師も意図的に言葉で伝えるようにするため，オノマトペも減少しているのではないかと考える」と述べられており，乳幼児の年齢が上がるにつれて保育者のオノマトペが減少したことは，乳幼児の発達が関連していると考えられる。乳幼児が日常生活の中で発するオノマトペは 2 歳ごろにピークを迎え，その後は減少していく。言葉の意味理解がなされるのも 1 歳半から 2 歳ごろだと言われている。そのため，保育者も乳幼児の発達に合わせて言葉を選び，使用していると考えられる。

（2）オノマトペの使用傾向

保育者が用いるオノマトペや一般語の使い方を乳幼児の年齢ごとに比較した結果，オノマトペのみの使用頻度は，0 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて低くなることがわかった。オノマトペと一般語の使用頻度は，0 歳児から 2 歳児にかけて増加し，それ以降は減少傾向にあることがわかった。一般語のみの使用頻度は，年齢が上がるにつれて高くなり，4 歳児，5 歳児で最も高いことがわかった。このことから，保育者は乳幼児の年齢ごとにオノマトペや一般語などの言葉を使い分けていると考えられる。

これには，前述と同様に乳幼児の発達が関連していると考えられる。0 歳児はまだ言葉の意味を理解できる時期ではないため，保育者が一般語で話しかけても理解が困難であると推察される。そのため，保育者は年齢の低い乳幼児に対してオノマトペを使用することが多くなると考えられる。乳幼児は年齢が上がるにつれて，徐々に言葉の意味を理解できるようになるため，発達に伴ってオノマトペから一般語への移行が進んでいく。小椋・吉本・坪田（1997）では，養育者は子どものレベルに合わせて育児語を使用し，子どもの発話を促そうとしており，子ども側の幼児語使用から成人語使用への移行に先駆けて，育児語の使用割合を低下させていたことが報告されてい

る。このことからも，保育者は乳幼児の発達に応じて言葉を使い分けていると考えられる。

（3）オノマトペを使用する対象の乳幼児

保育者がオノマトペを使用する対象の乳幼児を,乳幼児の年齢ごとに比較した結果,年齢が低い乳幼児には，全体に対してオノマトペを使用することが多く，年齢が上がると発達の気になる乳幼児に対してオノマトペを使用することが多くなることがわかった。このことから，保育者は乳幼児の年齢によってオノマトペを使用する対象を変化させていることが考えられる。

乳幼児の年齢が低い場合には，オノマトペと一般語を交えて，クラスの全体に対して指導することが多い。年齢が上がるとオノマトペの使用頻度は減少し，一般語の使用頻度が増えていく。そのため，年齢が高い乳幼児には，全体に対してオノマトペを使用することは少なくなるが，発達の気になる乳幼児に対して，オノマトペを用いて個別に働きかけることが多くなると考えられる。養護学校の授業における教師と知的障害児との対話を観察した有働・高野（2007）は，言語発達能力に偏りがある知的障害児たちの対話を促進するものとして，オノマトペが果たす役割について述べている。このような研究からもわかるように，オノマトペは年齢が低い乳幼児だけでなく，発達が遅れている乳幼児とのコミュニケーションにとっても，なくてはならないものであることがうかがえる。

（4）場面ごとのオノマトペの使用頻度

運動，生活指導，音楽，絵画・制作指導の 4 つの保育場面において，保育者が用いるオノマトペの使用頻度を乳幼児の年齢ごとに比較した。その結果，運動場面でのオノマトペの使用頻度は，0 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて低くなることがわかった。生活指導場面でのオノマトペの使用頻度は，0 歳児から 1 歳児にかけて増加し，それ以降は減少傾向にあることがわかった。前述したように，音楽場面と絵画・制作指導場面においては， 0 歳児と 1 歳児は年齢的に未経験の場面であると考え，0 歳児と 1 歳児の質問紙にはこの項目を使用しなかった。そのため，2 つの場面とも 2 歳児に使用する場合が最も高く，年齢が上がるにつれて低くなることがわかった。このことから，保育者は場面が異なる場合にも，乳幼児の年齢ごとにオノマトペの使用頻度を変化させていることが考えられる。

また，オノマトペを使用する場面や目的について自由記述で回答を求めたが，オノマトペを使用する場面は生活指導場面が最も多く，次いで運動（遊び）場面が多かった。使用したオノマトペは，「ゴロゴロ」，「ゴシゴシ」，「ブラブラ」など動作を表すものが比較的多く，原子・奥野（2007）

や近藤・渡辺（2008）の研究と同様の結果が得られた。オノマトペを使用する目的は，「動作を促すために使用する」という回答が最も多かった。これは近藤・渡辺（2008）でも述べられているように，「動作誘発時のオノマトペ」として，乳幼児に対する指示や指導などの意味合いが強く反映されているものであると考えられる。保育者が動作に関するオノマトペを使用することによって，乳幼児にその行動をわかりやすくイメージさせたり，何をすればよいのかを理解させたりすることにつなげることができると考えられる。このように，オノマトペを使用することで，乳幼児にとっては言葉の内容理解が容易になり，保育者にとっては乳幼児にスムーズな行動を促すことができる。オノマトペは，さまざまな保育場面において重要な言葉として使用されていることがうかがえる。

（5）オノマトペ使用の有効性

オノマトペを使用することについて保育者がどのような意識を持っているかを，乳幼児の年齢ごとに比較した。その結果，オノマトペを使用することについて有効であると感じている程度は，0 歳児から 1 歳児にかけて高くなり，それ以降は低くなることがわかった。このことから，保育者は年齢が高い乳幼児に対するよりも年齢が低い乳幼児に対してオノマトペを使用する方が好ましいという意識を持っていることが示唆される。

年齢が高い乳幼児に対してオノマトペを使用することは，オノマトペが幼稚な言葉であるという意識や社会的に不自然に映るという指摘もあり（高野・有働，2010），あまり好ましくないと考えている可能性がある。3 歳児を担当している保育者は，「できるだけオノマトペよりも一般語で話すよう心掛けている」と回答しており，いつまでもオノマトペを使用するのではなく，乳幼児の発達に合わせた言葉掛けをしようとしている姿勢がみられた。反対に，0 歳児や 1 歳児を担当している保育者は，「一般語で話すよりもオノマトペを交えて指導した方がスムーズに動いてくれた」，「オノマトペを使った方が子どもたちもわかりやすそうだった」などと回答しており，年齢が低い乳幼児にはオノマトペを使用した方が理解しやすいことを認識しているため，オノマトペを使用することについて有効であると感じている保育者が多いと考えられる。

（6）今後の課題

本研究では，もともとの調査協力者が少ない上に回収率が低く，得られたデータが全体的に少ない結果となった。さらに，今までに 2 歳児を担当したことがある保育者は，17 人中 16 人と調査協力者のほとんどを占めているのに対し，5 歳児を担当したことがある保育者は 17 人中 6 人であっ

た。このように，各年齢の担当経験の人数にも差が出てしまった。今後は，より多くの調査協力者を募り，各年齢の担当経験の人数も均等になるようにするなど，研究結果に厚みが増すような工夫をすることが今後の課題である。

今回の研究では，各質問項目を乳幼児の年齢ごとに比較し，それぞれに違いがあるかどうかを検討した。しかし，フェイスシートで尋ねた保育者の年齢や保育経験年数などの要因を考慮して言及することができなかった。今後は，乳幼児の年齢だけでなく保育者の保育経験年数なども要因として分析を行う必要があると考えられる。

また質問紙調査では，どのようなオノマトペを使用するかについて，具体的に自由記述で回答を求めた。得られたデータをまとめたものの,回答数が少なかったために,それらのオノマトペについて分類を行うことができなかった。今後は，今回の結果に基づき，回答が容易になるような工夫を行い，視覚・聴覚を表すオノマトペや動作・状態を表すオノマトペなどに細かく分類して考察していくことが必要である。

本研究では，これまで行われてこなかった保育者への意識調査を実施し，保育者のオノマトペ使用に関する知見を示すことができた点で，意義があると考えられる。本研究で得られた結果が，保育者の指導姿勢や意識の向上につながるきっかけとなり，今後の保育や教育の場で活用できることが期待される。

引用・参考文献

原子はるみ・奥野正義（2007）保育活動におけるオノマトペ表現の有効的機能に関する一考察　北海道教育大学教育実践総合センター紀要，8，167-174

早川勝広（1981）育児語と言語獲得　言語生活，351，50-56

近藤綾・渡辺大介（2008）保育者が用いるオノマトペの世界　広島大学心理学研究，8，255-261

近藤綾・渡辺大介・越中康治（2008）自然体験活動の中で見られる幼児のオノマトペの機能に関する一考察―観察事例による検討―　広島大学大学院教育学研究科紀要，57，305-312

近藤綾・渡辺大介・大田紀子・伊藤祥子・小津草太郎・越中康治（2008）保育における自然体験活動でのオノマトペ表現に関する実態調査　幼年教育研究年報，30，113-119

小椋たみ子・吉本祥江・坪田みのり（1997）母親の育児語と子どもの言語発達，認知発達　神戸大学発達科学部研究紀要，5（1），1-14

苧阪直行（1999）感性のことばを研究する―擬音語・擬態語に読む心のありか―　新曜社

高野美由紀・有働眞理子（2007）重度知的障害児への教育的支援におけるオノマトペの貢献　学校教育学研究，19，27-37

高野美由紀・有働眞理子（2010）養護学校の教師発話に含まれるオノマトペの教育的効果　特殊教育学研究，48（2），75-84

田守育啓（2002）オノマトペ　擬音・擬態語をたのしむ　岩波書店

田守育啓・スコウラップ,L.（1999）オノマトペ―形態と意味―　くろしお出版

丹野眞智俊（2005）オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える　あいり出版

有働眞理子・高野美由紀（2007）養護学校小学部の授業に見られるオノマトペ的発話―対話活性化の言語学的要因―　学校教育学研究，19，17-26

吉村浩一・関口洋美（2006）オノマトペで捉える逆さめがねの世界　法政大学文学部紀要，54，67-76

（受付日2015年10月16日）
（受理日2015年10月26日）